
記憶喪失から始まった災難

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶喪失から始まった災難

【Nコード】

N4931D

【作者名】

菜花

【あらすじ】

コナン達はいつものように旅行へ行っていた。しかし殺人事件がおきその犯人は自殺をするために海岸へ向かう……その後を追うコナンだったが……注意・一時期コナンの名前が和樹かずきにかわります。

プロローグ

江戸川コナンが居なくなつてから十日。

彼の捜査はまだ続いていた。

悲劇の幕開けは突然だった。

誰も予想なんてしていなかったであろうこんな日を。

ただ普通に犯人を追ひ、追ひ掛けたのが海岸それも崖……

犯人が自殺するために来たことなんてコナンにだって解つてた。

解つていたから犯人である彼女を助けようと手を伸ばした……。

此が悲劇のページ。

プロローグ（後書き）

久しぶりです！

今回ただの事件話です。組織はできません！でも怪盗キッドがでてきます！！！

読んでくれると嬉しいです！

菜花

第一話　突然

犯人である彼女、彼女が犯した罪――それは彼氏を殺害した。

三角関係だった彼女達、

『彼を自分の物にしたかった』

そんな理由で殺しそして彼女自身も崖から落ちて死ぬ計算だった。

其を阻止したのが紛れもなく江戸川コナンだった。

「こないで！！ 私は孝^{たかし}の側に行くのよ！ 行って幸せになるの」

彼女は泣きながら崖の近くへと向かった。コナンは一生懸命に説得をした。しかし彼女はそれを聞かない。そして彼女は崖から自殺したはずだった。

だが、彼女はその場にいた。彼女を助けた反動でコナンが崖から落ちてしまった。

蘭や探偵団、小五郎に灰原や博士と楽しい旅行にするはずだった。いつものように、懸賞で小五郎が旅行券を当てたのである。その晩同じホテルで殺人かおき彼女がにげなければ、誰も悲しまなくても良かった。

みんなが駆け付けた時には遅かった。ただ彼女とコナンが入れ換わりに崖から落ちる光景をスローモーションのようにみた。

なのに、その光景は一瞬の出来事で小さな子供が落ちた水しぶきの音だけが聞こえた。

「コナン君!!」

蘭は叫びにも似た声で崖に駆け寄ろうとしたが小五郎が引き留めた。

「う……そ……どうして？ 私が……私が自殺するはずだった。孝のどこいくはずだった……なのにどうして？」

彼女は腰が抜けたようにその場に座りこんだまま手錠をかけられた。

その後、崖下の海を警察が調べたがコナンの生死は確認されなかった。

第一話〜突然〜（後書き）

ありがとうございました

タイトルと内容あってないかな（苦笑）

と言うわけで始めました！何れくらいのストーリーが作者自身もわかりません。

まだ最後までかけてませんので。
では！

次回コナン発見されます（苦笑）

菜花

第二話　夫婦との出会い

　　～ 浜辺 ～

四十代の夫婦が浜辺を散歩していた。

「ね、あなた。彼処に誰か倒れているわ」

何処かお洒落な女の人とごく一般的な男の人。二人が見た人それは小学生くらいの少年だった。女の人が駆け寄る形でその少年を抱き上げた。辛うじて息があつた。そして痛々し怪我。夫婦はすぐ病院へと連れていった。

医者がいうには崖から自殺したかもしれないという。息があるだけでも奇跡だった。怪我は切り傷と全身打撲傷そして後頭部強打だった。

身元なんて分からない状態で二人はその少年を預かるといい、医者から了承を得た。

　　～ 三日後 ～

少年は目を覚ました。困惑したように周りを見渡し二人に気付いた。

その光景を見て男の人があわてて、起き上がった。

「おお。やっと目を開けよった。おい、千代^{ちよ}！千代」

男の人は千代の肩をゆすり起こした。

「ボウヤ大丈夫かね？ お名前は？」

心配そうに彼を見た。しかし彼の様子がおかしかった。

「な……まえ？」

「そう名前。なんていうの？」

「わからない……何も覚えてない」

夫婦は驚いて看護婦をよび診察をしてもらった。

「記憶喪失ですね。後頭部強打によるものですよ」

深刻そうに医者は二人に報告した。しかし、二人はさほど驚いてはいなかった。

「では、あの子治るのですか？」

「大丈夫だと思います。これは一時的な症状ですから」

「すみませんがあの子を引き取らせてください。記憶がもどるまででいいです。お願いします。」

医者に深々と頭を下げるともう一度了承を得た。

検索もおわり少年は、病室に戻った。

「今日から私達がお母さんとお父さんだからね」

少年におばさんが話しかける。

「そうだ！貴方の名前かすき和樹二人で考えたのよ」

二人はニコニコしながら少年に話しかける。しかし少年は一点を見つめ何かに怯えていた。その何かは一目瞭然でわかった。それは今まで少年が身につけていたであろう蝶ネクタイ型変声機と時計型麻醉銃だった。

「頭……痛い」

少年――和樹は頭をおさえて苦しみ出した。その光景をみてお母さんと名乗った千代が抱き締めた。

「大丈夫。大丈夫だから落ち着いて。ね？」

優しい声で一生懸命慰める。そしてその頭痛は少しずつひき、その代わり一人の女性の名を口に出した――蘭――と。

第二話　夫婦との出会い（後書き）

読んでください有り難うございます！

夫婦が見つけてくれました！小学生くらいの少年を！！

これから後期テスト一週間前に入るので
更新が今まで以上に遅くなりますm（| |）m
申し訳ございません

次回、米花町にいる方々と杯戸町、（後、過去の記憶かな）
では！

菜花

第三話　夢

　　～米花町～

コナンが居なくなつてから丸二日がたった。その間も情報が入らず打つ手がなかった。

そして、時が経つのははやいものでもう十日も過ぎていった。あの日から探偵団のみんなの元気が無くなり、蘭は学校帰りにあちらこちらの病院を調べ回った。

そして、発見した。しかし、蘭が来たころにはもう退院済みだった。

　　～杯戸町～

千代はコナンである和樹を自宅へと案内した。和樹があの病院で思ひ出したのは“蘭”という名前だった。

千代はいろいろ話しかけるが和樹は頷く以外無口だった。

「ここはね、杯戸町って言つんだよ！」

千代が教える。そして和樹は“杯戸町”とうことはで何かが頭に過った。

「近くに帝探小学校ってある？」

和樹の言葉に千代は驚いた。

「あるわよ。隣の町だけど。まさか、帝探小学校に通ってたの？」
「わからない。でも懐かしい感じがする……誰かとグループでいたようなそんな感じがする」

そこまで言いまた黙りこんでしまった。

「明日帝探小学校の周り散歩してみようか？」

千代の問いかけに和樹は頷いた。

その夜和樹は寝付けずに今までの事を思いだし考えた。

（蘭って誰なんだ？ あの日、頭に過った。大切な何かを忘れてる……それに小学校。なんで小学校が出てきたんだ？ 俺自身誰かもわからねえのに……ッ まただ、何かを思い出そうとすると、頭がわれるみてえにいたい……後少して何か思い出せそうなのにー）

和樹の思考はそこで途絶えた。

（ねえ……君）

（え……あ、何！？）

（好きな子いる？ ほら気になる子とかいるでしょ、学校に？）

（えっ、いないよ。そんな子）

（私はいるよ。すっごく気になるやつ！）

（へーそれってさっき搜してた・・・ってお兄ちゃんのことじゃないの？）

（……そうよ）

次の日

（夢？）

和樹は昨日寝入った部屋で目を覚ました。

（なんか懐かしいような……それに名前わかんねえまだ。誰の話しだったんだろう）

考えながら寝室からリビングへむかった。

「おはよう和樹」

「……」

返事のない一樹にもう一度名前を呼ぶと短く“おはよう”とかえされた。

「今日帝探小学校いつてみようか？」

「うん」

食事を済ませ二人は支度を始めた。

く帝探小学校く

二人は帝探小学校の周りを一通り散歩してみた。

「ここ知ってる。……ッ」

和樹は頭を押さえてしゃがみ込んだ。千代は和樹を抱いて帰ろうとした。

「工藤君!？」

後ろから赤みがかった茶髪の少女――灰原哀が驚いた顔で立っていた。

「え？」

千代は呼ばれた方を振り向いた。

「あ、すみません。私が知ってる男の子と似ていたので」

次に驚いたのは千代だった。千代は彼を見ながら灰原に話した。

「この子のこと知ってるの？ 十日ほど前に砂浜で倒れてたの。この子は今までの記憶がないのよ」

千代は寂しそうにいつの間にか眠っていた彼をみた。

「あの、私灰原哀って言います。もし、彼に私や江戸川コナン、毛利蘭って名前で反応したらここに電話してください」

灰原は電話番号を書いた一枚のメモ帳を千代に渡した。

「ええ、わかったわ。私の名前は山本千代っていうの」

名前をいい会釈をした。二人はそのまま別れた。

千代は“江戸川コナン”っという名前に聞き覚えがあり、家にかえると慌てて和樹を布団に寝かせ新聞を見た。

「やっぱり、彼キッドキラーね。フフ丁度いいわ」

千代は新聞を片付け

キッドから届いたカードを手にしながら和樹の寝顔を眺めた。

第三話〜夢〜（後書き）

お待たせしました。久々の更新です！

そして明後日からテスト開始！なので次の更新予定は連休か15日以降です。すみません。また一週間飛ぶことをお許し下さい！

さて

夢の中の会話は単行本・テレビアニメ版の一卷を参考に！
誰の会話かわかります

見なくてもわかるかもしれませんが……

・・・は人の名前入ります

では

次、事件ばいこと発生！

菜花

第四話　戻りつつある記憶

和樹が目を覚ますと千代が居た。

「何か思い出した？」

千代が優しく微笑み和樹を見る。しかし、和樹は横に首をふるだけだった。

「じゃあ、一つ二つ質問していい？」

和樹は不安な顔をしながらも頷いた。

「貴方の名前・江戸川コナン君？」

その名前に一気に和樹の目が丸くなった。

「灰原哀って子にきいたの。前に病院であなた“蘭”って言ってたじゃない？ あれは毛利蘭の事だったの」

和樹は頭を押さえいつ意識が飛ぶかわからない状態の中必死で堪えていた。

頭痛が治まり肩で息をしながら千代を見た。

「……思い出した。でも、まだ何かが抜けてる。僕の名前は江戸川コナンです」

ハッキリした口調で自分の名前を言う。しかし、コナンが思い出したのはほんの一部、工藤新一のことはまだ記憶をとりもどしていなかった。

「そうやっぱり、貴方は江戸川コナン君だったのね。ちょっとまっ

てて？動いちゃだめよ？」

念をおしつつ、部屋をでていった。

「はい阿笠ですけど」

千代はコナンについて灰原に電話をした。

「山本千代です。哀ちゃんだよね？」

灰原は“ええ”とだけ答え千代の言葉待った。

「彼江戸川コナン君に間違い無いわ。大分記憶戻ってきてるみたい」

「そう。それで、江戸川君を今からいうところに一緒に来てくれない？」

「それは出来ないわ。もう少しこの子を預らせて貰うわ」

「え？ ちよつと千代さん？」

「悪いわね、返せなくなったの。でも元気だから」

「ちよつと！ ちよつー」

灰原の声もむなしく、電話は切れてしまった。思いもよらない出来事に灰原は少しの間頭が真っ白になった。

「博士！ 工藤君が見つかった！！」

我にかえった灰原は急いで博士に事情を話した。

「なんじゃと！新一君が記憶喪失？今はどこにいるんじゃ！？」
焦りながら灰原に聞くが灰原は横に首をふるだけだった。

「わからない。たださっき電話があったの。このまま預かるって、
返せないって」

博士はオドオドしながら、警察を呼ぼうとした。

「待つて博士！もう少しだけ待つて！！」
灰原は必死に博士を止めた。

「また何か電話が入るかも知れない。だからもう少し待つて」
博士は受話器をおろした。

「千代さん？どうしたの？」

電話の前に立ち尽くした千代を見て声をかけた。

「いえ、何んでもないわ」

いつもの微笑みをコナンに返した。

第四話　戻りつつある記憶（後書き）

ふーなんとか連休中に出来上がりました。

もうすぐテストが終わるのでつぎからこんなに日空かず投稿できるとおもいます

さて

コナンの記憶少し戻ったのはいいものの厄介な事になりました。

千代はこれから何をするのでしょうか……。

次回公園でー何かが起きる

では

第五話　～監禁～

灰原の電話が終わり千代はコナンと外へでて、杯戸公園に向かった。杯戸公園につきベンチに座り周りの子共たちをみながら聞いた。

「コナン君？どうしてあんな浜辺に倒れてたの？」

「あまり覚えてない。ただ誰かを追って崖まできたの。でもその人と入れ換えに崖から落ちた。思いだそうとするといつも頭の中霧がかかってる」

コナンは下を向き拳に力を入れた。千代はその光景をみてコナンを抱き締めた。

「ゆっくりでいいのよ。焦らないで」

「ありがとう。でも早く思い出さなきゃみんなが心配してる。それに千代さん僕を返さないつもりでしょ？」

千代はハッとした。

「電話の内容を聞いていたの？」

焦る気持ちを押さえながら千代はいつもどおり笑ってみせた。

「少しだけ」

「そう……じゃあぐめんなさいね」

「う……」

誤りながら千代はコナンの腹部を殴り、気を失わせ家に帰った。

「ほんととはこんなことしたく無かった。でも貴方が悪いの。電話内容聞いた貴方がね」

一人言のように言いコナンの手足を縛って何時もの部屋に鍵をかけた。

あれから三十分が経ちようやくコナンは目を覚ました。体の異変に気付き懸命に解こうとしたがただ手首に傷がつくだけだった。

（ほんとに、誘拐の形になるとわな。情けねえ。でも、あの人なんか嫌な感じしねえんだよねあ。殴ろうとしたときほんとに謝ってる感じの顔してたし。もう少し探ってみるか）

コナンは手首を動かしながら千代の事を考えた。コナンは気を失っているうちに記憶をすべて取り戻していた。しかし今も尚記憶喪失のフリを続けた。

「あら、起きたのね。ごめんね。殴ったりして。でも、もう少しの辛抱だから」

千代はまた部屋に鍵をかけた

第五話〜監禁〜（後書き）

こんにちは

今日はバレンタイン〜

皆様何か良いことありましたか??

私は後期テストがやっと終わりました。
疲れしました。

と、今日から少しづつ投稿していきます

さて

もうすぐ、キッドがでてきます！

次回キッド出

では

第六話　千代とキッド

千代はコナンを家において、家を出た。

「ごめんね、コナン君」

一人呟くと険しい顔つきに変わった。千代は車に乗りキッドの待つ倉庫に向かった。

「出てきなさい！　キッド！！　もう予定時間よ！！」

千代はある倉庫にいき叫んだ。

「これはこれはお早いお着きでお姫さま」

フツと現れたのはキッドだった。キッドは不適な笑みを浮かべ千代を見た。

「返しなさい。私のダイヤ！！盗んだでしょ！」

「人聞きわるいですよ。あれは貴女が盗んだ物。それを返すために私は貴女から盗んだのです」

不適な笑みのまま千代に二、三步近づいた。

「なら、この子を殺すわよ？」

キッドの前にコナンが移った新聞の切り抜きを投げた。

「!?!」

キッドは少し驚き切り抜きを拾った。

「知ってるわよね？ 彼キッドキラーだもの。今は私の手の中! いつでも殺すこと出来るんだから」

フフッと笑う千代に齒切りをした。キッドは彼がどうして彼女のところにいるのが気になった。

「なぜ、ボウヤが出てくるのです？」

「コナン君は浜辺で倒れてるのを私が助けたのよ。そのまま記憶がないから家で育ててるわけ。わかったなら早く返しなさい」

理由を聞きこれまでに以上に驚いた顔をした。

「わかりました。では明日のこの時間ダイヤを返します。その時彼も返してください」

「良いわ」

千代の返事を聞き一瞬のうちにキッドは立ち去った。

第六話く千代とキッドく（後書き）

お待たせしました！

キッド参上です（笑）

少し短いですね……

すみません

これからコナンに災難が （の予定）

応援メッセージありがとうございます！

これからも、評価感想お待ちしております

第七話　千代とコナン

千代は家に帰るなりコナンの居る部屋の鍵を開けた。千代はコナンの側に行くと、自然と手首の方へと目を移した。見ると無数の傷が着いていた。

「何もそこまでしなくても。ほら、リビングにおいで、ご飯出来るから」

千代はコナンのロープを外しリビングへと向かった。

ご飯が終わりまたあの部屋へと向かう。抵抗してみるが、大人の力に勝てず後ろ手に手首を封じられた。そのまま抵抗出来ずロープで縛られた。

「お願い。抵抗しないで？　これ以上コナン君を傷付けたくないから」

少し涙目でコナンをみる。コナンは少しの間黙り口を開いた。

「ねえ？　どうして監禁するの？　千代さんは何がしたいの？　僕をどうしたいの？　殺したいの？」

一気にコナンは千代に聞いた。

「ただ貴方がキッドキラーだったから彼から宝石を取り返すときに材料になるって思ったの」

「キッド？」

コナンはポカンとした顔を千代にみせた。

「あ、そっか。まだ完全じゃないのね。あなたキッドキラーなのよ」
一旦部屋を出て彼が載ってる新聞を持ってきた。

「ほらね。だから、貴方を返すかわりに宝石を返すって約束したの」

「それで僕を監禁してるわけか」

少し睨むコナンに涙目になり訴えかけた。

「初めは監禁するなんて思っても見なかった。ほんとに貴方の親を
探す予定だったの」

コナンを抱き締め小さな声で話した。

（運わりーよな……俺）

心の中でため息を付き千代をみた。

「俺さ……もう記憶全部もどってんだ」

千代は大人びた低い声の主に驚いた。

「それで？ 取引材料に使われてる俺はどうなんの？」

「取引はしないわ。でも、宝石はかえしてもらっ」

「な！？」 相手はキッドだぞ！ そう簡単に行かねえだろうが！

！
」

驚きながらもコナンは怒鳴る形で千代を見た。もう探偵のスイッチ入りっぱなしで、子供の言葉使いなど忘れてしまっているような勢いである。

第七話く千代とコナンく（後書き）

すみませーん

サブタイトルが思い付かないバカな作者です（<|>）
考えて思い付かなくてアノような題名に……

すこし動きましたかね（苦笑）

コナン記憶がもどったこと千代にいました！！
これからどうなる？（作者自身考え中）

次回……電話

では！

第八話　電話・灰原とコナン

コナンは必死で千代を説得するがまったく聞こうとしなかった。

「嫌なんだよ。俺の前でそんな事されるの。俺が崖から落ちたの犯人を助けるため。それに俺を助けたのあんただろ？　助けてえんだよ。あんたも」

静かに千代の耳の側で囁くコナンは弱々しい声だった。

「ごめんね。でもやっと見つけたダイヤをキッドにそのまま取られるわけにはいかないのよ」

そのまま部屋を出ていつてしまった。残されたコナンは歯切りをした。

自分の無力さに嫌気がさすほどだった。

千代は部屋を出た後どこかに電話をかけ始めた。

「阿笠ですけど？」

「夜分すみませんね」

千代がかけた場所は阿笠博士の家だった。

「あなた、もしかして!？」

「ええ、私よ山本千代。彼の記憶全てもどってるわ。伝えたい事はそれだけ」

「ちよつと待つて！ 江戸川君の声を聞かせて！？」

千代は少し考えてから“わかったわ”と返した。

「ほら、灰原哀つて子が声聞きたいってさ」

千代はコナンの耳に受話器をあてた。

「工藤君？ 大丈夫？ 記憶全部戻ったの？」

今までに聞いたことの無いような焦り声にコナンは少し驚いた。

「ああ、大丈夫だ。記憶も全部戻ってるよ」

落ち着いた声を灰原に聞かせた。

「そう。ならいいわ。そうそう、愛しの彼女が貴方をずっとさがしてるわよ？」

「え？ ああ蘭のことか。元気だつて伝えといてくれねえか？ まだ帰れそうにねえんだよ、それにこの事内緒にしといてくれねえか？」

「それは貴方の状況次第で決めるわ。今どうしてるの？」

「一言で言えば監禁かな」

コナンは苦笑しながら千代をみた。千代が少しだけ睨み付けた。

「ちよつと何笑ってるのよ！！ 何もされてあいの」

呆れた声で、でも慌てたような声が電話の向こうから聞こえた。

「だから大丈夫だって。ただ拘束されてるだけだし、怪我もしてねえし、だから頼むこの事内緒にしてくれねえか？」

「わかったわよ。ちゃんと帰って来なさいよ！ほんとあなた何かにとりつかれてるわよ。帰って来たら、お被いしてもらいなさい」

「ハハハ……ほつとけ」

「まあ頑張りなさい名探偵さん？」

コナンが文句を言う前に千代が受話器を取り上げた。

「じゃあね。そう言うことだから」

そのまま千代は受話器を置いた。

「あなた喋りすぎ」

千代はコナンをおもいつきり睨んだ。

「じゃあ、あんたが無理矢理でも会話を中断すれば良かったじゃねえか」

「それは……」

「それに内容事態は一言も喋ってねえぜ？」

「わかったわよ！　そこにいなさいよ。出なきゃ殺すわよ」

「ご勝手に」

不適な笑みで千代を見た。千代はそのまま出ていった。部屋は空しく鍵の音だけが聞こえた。

く阿笠邸く

灰原はため息を付きながら受話器を置いた

「それでどうじゃったんじゃ」

「工藤君なら大丈夫よ」

「じゃが哀君新一が大変なことになってるんじやろ？」

「ええ、でもそれは彼と犯人の問題。私たちは彼が帰ってくるのを祈るだけ。わかったかしら博士？」

灰原はもう迷うことなく博士に有無をいわせない口調だった。

「哀君がそこまで言うなら信じてみよう」

博士はアタフタしながら灰原を見た。その顔はさっきとちがいに優しい顔だった。

「ありがとう博士」

灰原はまた受話器を持って電話をかけた。

「はいもしもし毛利探偵事務所です」

第八話　電話・灰原とコナン（後書き）

1日置いての投稿です灰原とコナンの電話話。二人あのやりとりす
きなのです

やっぱり灰原に逆らえないコナンでした（　　）

ってこんな楽しいストーリーじゃないよ実際！！　一人突っ込む作者

お知らせ

2月25日から29日まで投稿出来ません。

すみません

しかし3月1日からは再開です

これから宜しくお願いします

勝手な作者をお許しを！

次回電話パート2（誰と誰の会話か想像つくかも）

では！

第九話　電話・灰原と蘭

灰原が電話したのは探偵事務所だった。

「灰原です」

蘭はハツとして涙で潤んでいた瞳を拭き取った。

「あの。江戸川君のことで話さなきゃいけない事があるの」

「えっ？」

もう、会えないかも知れないと心の何処かで思っていたのかもしれない。止めたはずの涙が勢いよく出出来た。

「江戸川君は生きてる」

“願っていたことが叶った” 蘭の涙は一瞬で嬉し涙に変わった。

「い、いまどこに？」

涙声で一生懸命声を絞りだした。

「それがわからないの。今、彼記憶喪失なの。それで、『山本千代』って言う人のところにお世話になって、記憶が戻り次第帰ってくるわ」

灰原は出来るだけ蘭を心配させないように教えた。

「そっか！良かった。ありがとう哀ちゃん」
蘭は優しくお礼をいい受話器を置いた。

（大丈夫だね？　コナン君）

自分自身に言い聞かせるように胸に手をあてた。

く山本宅く

「フフ、よくねむってるわね」

千代はコナンのいる部屋の鍵を開けた。

朝食に睡眠薬をいれ今はぐっすりと寝ている。千代はコナンを助手席に座らせ、車を発進させた。

窓から吹く爽やかな風を受けながらコナンは目を覚ました。まだ働かない頭を少し降り千代を見た。

「あら、起きたのね。寝顔可愛かったのに」

千代は残念そうにコナンを見た。

「何処に行こうとしてんだよ？」

精一杯の睨んだ顔で千代を見る。少し動いてわかった。今コナンの首筋に細いタコ糸のような物があった。そのタコ糸にはカッターの刃が固定されていた。“動けば動脈切るぞ”と脅されているように……。そしてタコ糸は後部座席に繋がれていた。

「ごめんなさいね。あなたそうでもしないと暴れるでしょ？」

しかし、お構い無くコナンは拘束してある手を動かす。その度に小さな首に小さな傷がついていった。

「もう！わかったわよ。糸はほどくわよ」

千代は車をコンビニの駐車場に止め、コナンの口をガムテープで封じた後、複雑に絡む糸をとった。

そして、コンビニで買ってきた消毒液でコナンの首筋を治療した。少し痛みに歪む顔を見ながら“自業自得よ”と小さな声で呟き、手のロープをきつく結び直し、ガムテープを外し車を発進させた。

第九話　電話・灰原と蘭（後書き）

お久しぶりですm（　　）m

今日か明日で2月の投稿は終わりです
すみません一週間あきます。

さて

今回の話し車の中のコナン怖いですよ
ね
ここ消すかどうか迷ってましたが書きました。次の話しの為に
想像すると怖いです（苦笑）

哀ちゃん蘭に話しました！まあ半分は嘘の情報ですがね（笑）
これで蘭すこしは大丈夫かな

事件のことしってるのコナンと千代はもちろんキッド哀ちゃん博士
です

みんな口が硬いはず！！

では

明日か来週に会いましょう！！

第十話　お願い

「車の中」

千代は運転しながら、コナンを確認した。

「お願いがあるの」

千代は前をみたままコナンに話しかけた。コナンは何も言わず千代の方を向いた。

「今から飲んで欲しい物があるの」

車を傍らに寄せてポケットから小さな袋を出した。

「睡眠薬？」

コナンは思い当たる薬の名前を口に出した。

「ええ、そうよ。お願い口あけてくれる？」

「でも、なんで？」

「あなたはそこまで知らなくていいのよ。別に殺したりしないから」

「それって誰を？」

コナンは千代を睨む。殺されないのは解りきっていた。今までの行動をみればコナンを殺す気など全くないのだから。しかしコナンが

きいたのはキッドのこと。コナン自身を殺しはしないけどキッドは違う。千代はキッドを恨んでるコナンはそう確信した。

「誰ってあなたに決まってるじゃない」

「そっか。でも、こっちからもお願い聞いてくれる？」

驚く千代に不適にわらうコナン。

「千代さんに従うかわりにキッドを殺さないでくれる？ 千代さんキッドを殺そうとしてるでしょ？」

「あ、あなたには関係ないことよ」

焦る千代をみてもまだコナンは不適に笑う。主導権が少しづつコナンに向いていった。

「ふーん。千代さんがOK言うまで俺は飲まないし、このままだと予定時間すぎちまうぜ？ それにキッドを殺せば監獄行きだ。今から千代さんがやろうとしてることはもう俺にはどうにもならねえこと。でも殺さなかったら千代さんはそのままこの世界で生きていける。俺が監禁されてることは俺らと灰原しかしらねえから別に世間ではさわがれてねえんだ」

「でも、彼女が警察に言ったら」

「言わねえよ。あいつ約束守る奴だし。だから俺にしたことはいいから、キッドを殺すな」

「わ、わかったわよ。殺さなきゃいいんでしょ？　殺さないからこのとこ誰にも言わないで」

「大丈夫だから。千代さんが守ればの話だけど」

少し沈黙が続いた。コナンの顔は真剣そのものだった。

「わかったわ。誰も殺さない。だから」

「……わあつたよ」

千代は睡眠薬をコナンの口へと入れて水を注ぎ入れた。

〈数十分後〉

コナンは徐々に意識が朦朧としはしめてきた。必死で睡魔と戦う。しかし、勝てるわけでもなく最後に千代にぎりぎり届くような声を絞り出した。

「絶対……守れよ……」

そこでコナンは眠りについた。

「大丈夫だから。貴方ほんとに小学生なの？」

眠りに就いたコナンの頭を撫でて、千代はそのまま倉庫へと向かった。

第十話くお願いく（後書き）

ぎりぎり日曜日です

勝手ながら明日から29日まで休みます

はい、車の中での会話！簡単にコナンに薬のますのは難しいかな（笑）

お互いのお願い叶うのだろうか！！

次回キッドと千代

では

第十一話 どうして？

〈倉庫〉

千代は車の助手席の窓をほんの少しだけ開け倉庫の中へと入って言った。

「時間通りですね。お姫さま？」

千代がある程度倉庫の中へと進むと、どこからともなくキッドが現れた。

「ええ。時間は守るタイプだから。さあおしゃべりする時間わ無いわダイヤを返さない！」

「これですね？」

「ええ」

掌いっぱいのそのダイヤを千代の前に見せた。

「それで、ボウヤは？」

「ここには来てないわ。」

千代は嘘をついた。キッドの方を真っ直ぐむいて、目をそらすこと

なく見た。

「“ここ”にはでしょ？」

キッドは簡単に見抜くように訪ねた。

「しかし、この側にいますよね。そして、彼が今ここに現れないのを見ると“動けない状態”というわけですね？」

千代は焦った。何もかも見透かされているような目をしたキッドに一步二歩後退りをした。

「まあこれは返しましょう。もう用はすみみましたので」

キッドは千代にダイヤを軽く投げ立ち去ろうとした。

「ねえどうして？」

その言葉にキッドが足を止めた。

「どうして何もしないの？ 貴方たちおかしいわよ！ 私みたいな人をどうして助けるの？」

「“貴方たち”ってことはやはりボウヤもってことですね？ まあ答えはボウヤと一緒にですよ。ダイヤのほうは美術館に返しといってくださいね？」

キッドは言い終わるか終わらないかで姿を消した。

千代はコナンの居る車に戻った。

今も寝てるコナンの首に果物ナイフを当ててみた。しかし、それ以上が進まなかった。

（今なら簡単に殺せるのにどうして？ どうしてこれ以上動かさせないのよ！！）

心の中で叫ぶ。コナンを涙目でみつめワナワナ揺れる手からナイフが落ちた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

壊れた機械のように何度も何度も謝り車を発進させ家に帰った。拘束していた手足をほどきおぶって部屋に入る。布団をしきそこに寝かせた。千代はその横に座った。

第十一話 どうして？（後書き）

読んで頂きありがとうございますm（　　）m

一週間かってに休んですみませんでした。

理由

学校のほうでテストがあり点が悪く追試をつけていました。（作者馬鹿なので……）

しかし今日おわりましたのでまた再開です

さて今回は……

キッドとあった千代。キッドはいろんなことに気付いてました。

不思議ですね……そこはスルーしてください詮索しないでください……。

キッドとわかれた千代はコナンのいる車にもどって危ないことしましたーが無事でした（笑）

千代はコナンを巻き込みではあるけどどうしてもコナンを殺すことできない人なんです。コナンが千代をいい方向に戻していますね（多分）

では

次、寝起きのコナンと千代の会話

本日はありがとうございました。

第十二話　無事

一時間後小さな呻き声と共に目を覚ました。周りを見渡す。そして千代と目があった。

「もう……終わったから……」

「そっか」

「ごめんなさい。貴方を……貴方を殺そうとした」

千代の言葉に驚かないコナンは別のことに気付いた。

（拘束されてない）

コナンがフツと笑った。

「んで？　殺そうとして殺せなかった訳は？」

自信たっぷりで千代に聞いた。

「分からない」

「それでいいんだよ」

「え？」

「あんたの心にまだ“人間”がのこってたんだから。心の中で葛藤してたんだろ？　で、善が勝った。それでいいんだよ」

止まっていた涙がまた流れ出る。布団に入ってるコナンを抱き締めた。コナンは急なことに驚く。

「ごめんなさいごめんなさい」

今日何度目かの謝罪。しかしコナンから以外な言葉がかえってきた。

「千代さん。ありがとう」

次に驚くばんの千代。目を丸くした。

「あなたに感謝されるようなこと、私してないわよ。逆に傷つけてばかりだったじゃない」

抱き締めていたコナンを布団の中に戻した。

「千代さんは俺をまた助けた。これで二回目。もしこの誘拐が千代さんじゃなかったら、多分この世に居なかったと思う。睡眠薬飲んだとき千代さんにはいつでも俺を殺せたはず。でも千代さんは逆のことをした」

目がみるみるうちに大きくなる。限界に近い目でコナンをみた。

「あなた、お人好しって言われたことない？」

「え？ ああ」

曖昧に返事を返した。

「普通ならこんなことされて“ありがとう”なんて言葉思い付かないわよ。むしろ憎むわよ」

“そうか？”とキョトンとした顔をした。

「貴方って何者なの？」

千代は神経にきいた。コナンも目を背けずニッコリわらった。

「僕はただの小学生だよ？」

ニッコリした顔がそれ以上にニッコリした顔になった。

「ほんとかしら？」

千代の疑う目。今度はフツと笑い大人びた顔になったコナンは先ほどより低い声をだした。

「ただの探偵だよ」

コナンの大人びた顔をみると千代は笑みを浮かべた。そして心からの感謝をした。

「ありがとう」

コナンはだるい体を起こそうとしたが千代に止められた。

「今からお粥作ってあげるから大人しく寝ときなさい？ まだ、だるいんだよ」

そついい残し千代は部屋を出ていった。今度は鍵のしめる音はしなかった。

「誰も傷つけることなく終わったんだな」

仰向けの状態で誰に話しかけることなく一人眩き目をとじた。
三十分後

コナンは目を覚ました。起き上がって周りをみたけどまだ千代はきていなかった。

部屋に時計がなく自分自身どれくらい寝ていたのかわからなかった。

「コナン君おきたのね」

数分後ドアが開き千代が両手にはお盆をもって入ってきた。

「出来たわよ」

千代はお粥をお茶碗にいれコナンに差し出した。

コナンは少し警戒した。

「大丈夫よ。薬なんて入ってないから」

コナンは安心してお茶碗を受け取った。少し食べてみる。

「あ、美味しい」

「あたり前じゃない。私これでもレストランで働いてたのよ」

千代は笑いながら、コナンに話した。

「ねえ、コナン君。明日帰ろっか？」

「え？」

コナンは食べていたお粥の手をとめた。

「もう、終わったし。私も大丈夫だから……哀ちゃんって子も心配してるだろうしさ。ほんととは離したくないんだけどね。だって私たち子供いなかったから。なんか子供が出来たみたいで、手放したくないな」

千代は寂しそうにコナンを見つめた。

「そっか。じゃあ、明日一日千代さんの子供になってあげる」

ニツコリ笑うコナン躊躇う千代。

「いいの？」

「いいよ」

子供の声を出しわらった。

「じゃあ、明日遊園地いかない？　いつて見たかったのよ」

笑いながら千代はコナンを抱き締めた。コナンの顔が少しだけ赤くなった。“これで何回目だろうか”　つと心の中で思った。

第十二話 無事 (後書き)

3月です！

色々ありましたが一件落着ですかね (笑)

一日千代の息子 (笑)

もうすぐコナンが米花町にかえれます！！

次回遊園地

では

第十三話 トロピカルランド

「トロピカルランド」

千代と夫とコナン、三人でトロピカルランドにきた。改札口の前でコナンは二人にわからないよう苦笑いをした。この遊園地は“コナン”の原点だったことはこの夫婦は知らない。

「ねえコナン君はどこいきたい？ あ、この江戸川コナンって名前なんだよ」

千代は夫である健二^{けんじ}に話した。

「ほーコナンね。両親コナン・ドイルが好きなんだね」

健二はニコニコしながらコナンをみた。

「うん！ 大好きなんだ」

この上無い笑顔でコナンは振る舞った。

その後ジェットコースターをはじめ、お化け屋敷など楽しんだ。

「お昼何がいい？」

少しの空白の時間がながれた。

「ホットドッグが食べたい！」

「分かったわ」

千代はホットドッグを買いにいった。

「コナン君？」

「何？」

健二がコナンを呼んだ。子供スマイルをだし健二と向き合った。

「悪かったな。千代がやったんだろ？ 手首の傷」

「え……？」

躊躇いながら手首をそっと隠した。

「大体は目星はついておる。千代は今までにない笑顔だったからな。今まで何かがあったことくらい夫ならわかるよ」

「流石だね。でもおじさんが謝る理由はないよ」

コナンは大人びた顔をした。そこで千代が帰ってきた。

「はい！ コナン君ホットドッグ！」

「ありがとう千代さん」

お昼を済ませてまた遊んだ。最後に観覧車と記念撮影、千代はほんとに楽しそうにしていたことにコナンは胸を撫で下ろした。

「後はパレードだな」

健二が嬉しそうな顔をした。

「あれ？ けんちゃんパレード好きだったの？」

からかうように千代は健二に話しかけた。

「かもしれないな。だってお前とみれるんだから」

健二がボソリといい千代の顔が赤くなった。コナンは二人の行動に苦笑いをした。

第十三話 トロピカルランド（後書き）

ごめんなさいこんなにもあいてしまって（ノ　丁）

いろいろありここに来るのがとても遅くなりました（＜　―　＞）

はい、今日始めてまともに千代の夫・健二が出てきました！
そして事件のこと薄々感づいていることにコナンもびっくり！でしたね！

次回トロピカルランドから帰ってきて

では

第十四話　千代との暮らし最後

　　～自宅～

千代たちはお風呂をすませコナンと三人で布団を並べて布団に入った。

「今日はありがとね。楽しかったよ」

千代は深々とお辞儀をした。

「僕も楽しかったよ」

笑い合うふたり健二もまた穏やか笑みを浮かべていた。

「明日哀ちゃんに連絡するね。ほんとにありがとう」

「千代さんが大丈夫なら帰るよ」

千代は“大丈夫”とコナン笑みを浮かべた。三人はそれぞれ眠りについた。

　　～次の日～

千代は灰原に電話をかけた。

「もしもし？　山本千代です。灰原哀ちゃんいますでしょうか？」
千代からの電話に驚きながらも灰原はいつもどおりセリフを返した。

「はい、私が灰原哀です」

「今日、江戸川コナン君を帰します。あなたの住所教えて下さい」
灰原は博士の住所を千代に教えた。

「分かりました。では後程」

千代はそこで電話を切った。コナンはその会話を聞き内心ホッとした。

「コナン君もうすぐだから。あ、そうだ返さなきゃ行けない物があるの。こっちに来て？」

コナンは千代の後続き千代の部屋に入った。千代は押し入れから大事そうにそれをだした。

「あなたが初め身につけてた物。これ見てあなた結構震えてたからいままで隠してたの」

それは蝶ネクタイ型変声機や時計型麻醉銃などのいままでコナンが身につけていた物だった。

「ありがとう千代さん」

コナンは全ての物を受け取った。

「さあ帰りましょ」

千代はコナンに手を差しのべコナンもその手を掴んだ。そのまま千代は部屋をでて車に乗った。

第十四話　千代との暮らし最後（後書き）

題名思い付かなかった
もうすぐ終わりです。

次回まだ出来上がっていません（涙）

では

第十五話　博士の家

く阿笠邸く

博士の家にチャイムが響いた。灰原は待ち構えていたように扉を開けた。

「おはようございます。朝早くにごめんなさい」

千代は深々と頭をさげた。

「いいんじゃないよ。さあ中に入りなさい」

博士が優しい声で喋りかけ千代を家の中に招いた。

「よく助かったわね」

灰原がコナンの側にいき小声で話しかけた。

「ああ、心配かけてごめんな」

「別に心配なんて……って工藤くん首怪我してるじゃない!？」

「え？ああ、ちょっとな」

「ちょっとつてなによ」

「いや、抵抗みたいなことしてさ……」

灰原の顔がみるみるうちにつり上がり睨み付けた。

「馬鹿じゃないの？ 抵抗ってあなた探偵でしょ？ 抵抗したらどうなるかなんてわかってることじゃない！」

小声で話していた筈の音が玄関中に響いた。

「哀ちゃん！ コナンくんは悪くないから。だから、ね？ お願い彼を攻めないで！！」

博士と話していた千代がコナンの横に行き頭を下げた。

灰原は無言で立ち去り地下室への階段を降りようとした。

「哀ちゃん！！」

「わかってるわよ！ 別に攻めてるわけじゃない。ただ心配になっただけよ」

「そっか。ごめんね。沢山迷惑かけて……でも、私コナンくんに会えて良かったって思ってるわ。でなきゃ今ごろ誰かを殺していたかもしれないから」

「そう……また彼危険犯してまで助けたのね」

すこし離れたところに居るコナンを優しくそんな目で灰原は見つめた。

「ええ、ほんと他人のことばかり考えてたわよ」

千代もコナンを見つめた。

「それで貴方はこれからどおするの？」

「せっかくだから夫と仲良くするつもりよ」

「そう……頑張りなさい」

灰原はそう言い残り地下へと向かった。千代は深々と礼をした。

「あ！、千代さん。ダイヤかえして？ 僕が返しておくから」

ニコツとした顔でコナンは千代に近づき手をだした。千代は素直にダイヤをコナンに渡した。

「それで、これをどうするつもりだったの？ 夜中にダイヤ調べてたでしょ？」

千代は驚きコナンを数秒間見つめたが、目をそらし小声で答えた。

「ごめんなさい。それだけは言えないわ。でも、もう用は済んだわ」

コナンはそれ以上追求せずにダイヤを大事にしまった。

「それじゃあ、私はこれで。ほんとにありがとう」

博士とコナンは玄関まで見送った。

その後、玄関に一枚の手紙が落ちているのにコナンは気付いた。

コナンは拾い上げ差出人を見たが書いていなかった。
表には

“江戸川コナン”

とかかれてあった。

第十五話　博士の家（後書き）

久々の投稿です。お待たせしました！

無事コナン帰ってきました！パチパチ

もう数話でこの話しおわりです！

そして

誰か～～キッドとコナンが会話してる時のキッドの口調を教えてください～～～～～～～～。

help me～

次キッドとコナンです

口調がわからない……

千代とキッドは簡単なのに

コナンとキッドは難しいと思うのは私だけ？

では

第十六話　夜

　その日の夜

　とあるビルの屋上

　小さな子供の姿と白い服をきた人が立っていた。

　「俺を呼び出して何のようだ？」

　玄関に落ちていた手紙はキッドがコナンに宛てた手紙だった。

　「まあそう怒らないください。捕らわれし王子」

　いつも女性たちにはくような口調に氣にくわないコナン。

　「警察よぶぞ？」

　「冗談ですよ。今日ここに呼んだのはダイヤの件」

　お互いが不適な笑みをみせた。

　「これか？」

　コナンのポケットからダイヤが現れた。

　「ああ。渡してもらおうか？」

　キッドが二、三步近づいた。コナンは後退せずキッドを睨む。

　「渡すよ。どうせ、オメーに返してもらうつもりだったしよ」

コナンはキッドにダイヤを投げた。キッドは軽々つけとった。

「助かって何よりだな名探偵？」

軽々とした笑顔は逆光からみると挑発的な笑顔だった。

「お前に心配されるほど、弱くねえよ」

「一時期殺されかけてなかったか？」

「うつせー。なんで知ってんだよ。とつとと逃げねえとまじ警察呼ぶぞ？」

「見てたからな、お前の首にナイフが突きつけられているところをな。そろそろ退散するよ。ありがとな名探偵」

「見てたのかよ……。それより礼言われるようなことしてねえよ。ただ捕まっただけだ」

礼をいい飛び立とう背中をみせた時呆れ顔でコナンはキッドをみた。

「イエイエ。お前がいなかったら怪我をしてたかもしれねえから、じゃあな！」

キッドは屋上から飛び立った。

「だから、なんもしてねえって」

空を見上げながら一人ごとのようにいったあと階段をおりた。

第十六話 夜（後書き）

キッドの口調悩んだあげくあのような口調になりました。 m（

ー）

アドバイスを……未熟者より

さて、キッドとの接触もおわり次は久々蘭ちゃん登場かも！

では

第十七話　毛利家に帰路

コナンはキッドと別れ博士の家に帰った。

「あら、お帰りなさい？　コーヒーでも飲む？」

帰ってきたら灰原がリビングに座っていた。

「ああ、もううよ」

「で？　今まで何してたか教えてもらいましょうか？　探偵さん？」

コーヒーを渡しコナンに向きう形で椅子に座った。

「わかったよ。まず、お前らと一緒に旅行いった日覚えてるよな。あの日俺と犯人入れ換えに崖から落ちただろ？　その後浜辺で倒れた俺を千代さんたちが見つけてくれたんだ」

「あら案外優しい人なのね」

灰原フフッと笑いながらコーヒーを口にした。その後記憶がなかったこと、千代がキッドを憎みキッドキラだったコナンをかえすことが出来なかったことをほぼ全てを話した。ただコナンが眠らされた後殺されそうになったことは省いた。

「ふーん。あなたつくづく不運よね。まあ明日彼女のところに帰りなさいよ。記憶喪失ってことは話してあるから。」

「サンキュー灰原」

「それじゃあ私寝るから。あなたもじつくり寝ときなさいよ。あと、手首の傷と首の傷さっさと直しときなさいよ。彼女が心配するから」
そのまま博士がいる寝室に向かった。

「治すつつても自然に直るの待つしかねえって」

「なら私の万能薬試してみる？」

寝室にいったはずの灰原がそこに立っていた。

「結構です！」

コナンは慌てて手をふった。

「残念。じゃあハイネックの服きて帰りなさい？」
また灰原は寝室に消えていった。

〵次々の日

毛利家〵

コナンは灰原の言うとおりハイネックの服をきて階段を上がりドアに手をあて開けた。

「ただいま」

二人は驚きドアに注目した。

「コ、コナン君！？」

蘭がドタバタとコナンにかけよりコナンを抱き締めた。

「良かった。良かった。心配したのよ？ 哀ちゃんから記憶喪失だつてきいてびっくりしたんだからね。それで大丈夫なの？」

蘭はコナンに抱きついたまま話しかけた。

「うん。大丈夫！全部記憶戻ってるよ！蘭ねえちゃん！」

元気のいい子供のふりをしてニコニコ笑った。

「そう良かった」

蘭はコナンを解放した。

第十七話　毛利家に帰路（後書き）

ほのぼのです！

灰原とコナンのいつもの会話

万能薬どんな効果があったのでしょうかね（笑）蘭とコナンやっと出会いました（　　）

こちらもクライマックスです！

もう少しのお付き合いを！！

では

第十八話　最後の災難？それとも最初の安心？

コナンは久々の毛利家で朝御飯を食べた。

「明日から学校いける？　今日は休みとったから」

「うん！　大丈夫だよ」

「今日はゆつくり休んでね。それに……」

「何？」

少しうつむき加減の蘭にニコニコしながら蘭を見た。

「コナン君熱あるでしょ！？」

「へ？」

突然な蘭にコナンはポカンとした顔になった。“熱がある”コナン自身も分からなかったことだった。長年弟と一緒にいるためのカンだったのかもしれない。

蘭は体温計をコナンにわたした。体温計が一定の音を鳴す

「ほらやっぱり三十八度もあるじゃない」

蘭はコナンを小五郎の部屋までつれていった。

「大丈夫だよ。そこまでしなくても。全然平気だよ？」

コナンの言葉を見せしめられ蘭はせつせと布団をだしはじめた。

「何が平気よ。しんどいんでしょ？ それに甘えていいのよ？」

コナンは照れくさそうに頷き、ほらっと布団の中に寝かされてしまった。

「学校いつてくるから大人しくしとくのよ？」

「うん」

蘭はその場から出ていった。

（熱って実感無かったんだけどなあ。いろいろ有りすぎて、ここに帰ってきてホッとしたんだろな。まあ今日くらいゆっくりするか！）

コナンはそのまま目を閉めた。

子供の体ということ一度目を閉じると一定の寝息を立て、すうつと夢の中へと誘われていった。

夕方

蘭が帰ってきた。真っ先に小五郎の部屋に向かいそつとドアを開けた。コナンは起きることなく寝ていた。

蘭は微笑ましく、少し乱れた布団を直し出ていった。夕食を作ってる時にコナンの声が聞こえた。

「お帰りなさい蘭ねえちゃん」

目を擦りながら台所に立っていた。

「ただいまコナン君。熱はかりに行こっか」

コナンの手を取り居間にいく。蘭は体温計をコナンに渡した。

また一定の音になる。

「三十七度二。結構下がったね。今日お粥だからねコナン君。部屋までもっていくからもう少し寝てていいわよ」

蘭はコナンの頭を撫でまた台所に向かった。コナンは蘭の言つとおりまた布団に入った。

ドアの向こうで足音が聞こえた

「出来たよ。コナン君！」

蘭は一人用の鍋とお椀レンゲとお茶をオボンにのせもってきた。

「ありがとう」

コナンは笑顔で蘭にお礼を言い座り直した。
その後ご飯を食べて眠りについた。

第十八話　最後の災難？それとも最初の安心？（後書き）

最後の災難？最初の幸せ？

二つの題名でなやみました。まあ意味は一緒ですね（ハハハ……）

さてと、おもいつきり蘭とコナンです！

コナン一日ねてばかりの生活でした！

でもたまにはいいよね

それに蘭優しいね！

理想の姉なうんてね

私自身長女だからこんなこと味わったことないですが……。普通するのかな？妹や弟の看病。する……。よね？

次回手紙

では

第十九話　手紙

「朝」

着替えをすませてコナンは朝食のある居間にきた。

「はいこれ。体温計」

蘭が待つていたかのように体温計を渡した。

コナンは蘭の隣に座り体温計を計った。

「三十六度四。うん大丈夫良かったね」

三人は朝食を食べくしぶりに蘭と学校に向かった。

「おい！コナン」

元太たちが嬉しそうに手をふっていた。

「蘭ねえちゃん行ってくるね」

「行つてらっしゃい」

コナンは四人の元に駆け出した。

「久しぶりですね。あの日何があったんですか？」

急な質問にコナンは戸惑いなく話した。内容には嘘は無かったが事件に巻き込まれたことは省いた。

「そんなことがあったんですか。大変でしたね」

「コナン君風邪もついいの？」

それぞれ心配する声は少し嬉しい気持ちにされた。

「大丈夫だよ。もう記憶も風邪も治ったから。心配してくれてありがとうなオメーら」

「当たり前ですよ！ 僕たち少年探偵団なんですから！」

「そだぞ！一人でも抜けたら探偵団じゃねえしな」

「それに歩美の一番の人だもん」

アツサリ言われた言葉に光彦と元太を怒りに染めた。

「「コーナーン（君）」」

「ちよっオメーら待てって」

「抜け駆けは許しませんよ！」

二人に追いかけれ学校まで一気に走った。

「歩美変な事いった？」

「いえ。大丈夫よ」

前の騒ぎを見ながら歩美はキョトンとした顔で灰原はにわかに笑っていた。

（帰り道）

朝の嵐から免れたコナンは久しぶりに使った体力でげっそりしてい

た。

「はい。これ」

「うん？ 何だよこれ」

「知らないわ。 “江戸川コナン様” ってかいてあるから貴方の方ですよ？」

みると白い手紙のようなもので、差出人が山本千代と書かれていた。
「昨日の夕方博士のポストに入ってたわ」

「サンキュー」

コナンは大事にランドセルにしまった。

第十九話　手紙（後書き）

手紙と書きながらメンイすくなかったですね
今日の晩最終話を投稿するとおもいます

手紙の内容で終わりです

最終話〜仲良し〜

コナンはみんなと別れ事務所に向かった。

「ただいま！って誰も居ねえのかよ」

コナンはソファアーの上にランドセルをおきその横に座り手紙を出した。

□

江戸川コナン様

先日は本当にありがとうございます。

あの日コナン君に会っていただければ人、一人を殺していました。

コナン君に会えたこと心から感謝します。

沢山辛い思いさせてしまったことお許しください。

今は主人と仲良く暮らしています。最後に盗んでしまったダイ

ヤ美術館に戻っていました。ありがとうございます。

これからはバカなことせずに生きていきます。

山本千代』

コナンの顔が笑顔になり、手紙をしまったため自室へと向かった。コナンはもう一度読み返してしまった。

「ただいまー」

「おかえりなさい。蘭ねえちゃん！」

ニコニコ出迎えるコナンに蘭もコナン以上に笑顔を見せた。

「コナン君機嫌いいね。いいことあったの？」

「うん！」

「そっか。良かったね！あ、買い物行こっか！」

「うん。どこにいくの？」

「杯戸町よ！ 今日安売りなの」

「そっか！」

コナンと蘭は用意をして、バスにのり杯戸町へと向かった。

くスーパーく

「あ、あつたあつた！今日は豚カツね」

コナンに肉をみせニコニコ微笑んだ。

晩御飯の材料を買いレジにいきかった材料を袋につめ帰ろうとしてコナンを呼んだがコナンの返事がなく振り向いた。

そこには優しそうな夫婦とコナンの姿があった。蘭はその夫婦に礼をした。

「コナン君？ この人たちは？」

「あ、僕を助けてくれた夫婦だよ」

「そつか。その節はありがとうございます」
蘭は深々とお辞儀をした。

「いえ。こちらこそ、ご迷惑おかけしました」

夫婦もまた蘭たちにお辞儀をした。
その後少し話をして別れた。

「コナン君助けてくれた夫婦とっても仲良しだったね」

「うん！」

二人は夕日の中手を繋ぎながら帰っていった。

〈完〉

2008年3月31日

最終話〜仲良し〜（後書き）

今までありがとうございます！

下手な手紙……作者文章不足ですね

拝啓敬具を使う予定でしたがやめてくれた言葉に直しました

あと

千代さんと蘭を合わせたくてわざわざ杯戸町へと買い物に！

全く会話無かったけれど楽しく話てるところを想像してください

〜記憶喪失から始まった災難〜

無事完結致しました。応援、評価、感想、アドバイス頂き有り難う御座います。

とても心の支えになりました

どんな話でも最後はハッピーになるように心掛けて作品を作っていきます。

これからも、宜しくお願いしますm（　　）m

短いですがこれで失礼します

2008年3月31日

菜花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931d/>

記憶喪失から始まった災難

2010年10月9日21時10分発行